

## 体験グローバル 「企業訪問（実地調査）」のアンケート結果

4年生を対象に、「グローバル社会での企業活動や地元産業、行政についての研究を行う」ことを目的としてホーコス株式会社（本社・本社工場）、アサヒグループ食品株式会社（天野実業株式会社）（岡山工場第2プラント）、株式会社エフピコ（福山リサイクル工場）、福山大学（生命工学部生命工学科久富研究室）、福山市役所（企画政策課・福山駅前再生推進室・情報発信課・都市計画課・産業復興課・選挙管理委員会等）の5つに分かれて訪問しました。訪問先では、企業の方や市役所の方から話をさせていただいたり、施設の見学などをさせていただいたりしました。

また、実地調査に当たり、事前に訪問先についての情報収集を行ったり、課題研究のテーマに関連させた質問をそれぞれ用意したりしていたので、質疑応答の時間には様々な質問が生徒から投げかけられました。それらに答えていただく中で、生徒は企業や行政について、地域について考察を深めることができました。学んだ内容は、これからの課題研究に活かしていく予定です。

実地調査に参加した生徒に対して次のアンケートを行いました。

### 質問項目

1. 今回の企業訪問(実地調査)は興味・関心をもつことができましたか
2. 今回の企業訪問(実地調査)は新しい考え方や視点が学べるものでしたか



以下は、それぞれの企業訪問（実地調査）の活動報告と生徒のレポートを集約したものになります。

**場 所：**ホーコス株式会社 本社・本社工場（広島県福山市草戸町 2-24-20）

**参加者：**生徒 40 名，引率教員 4 名

### 実施内容

#### （1）挨拶・会社説明

はじめに、菅田社長よりご挨拶をいただきました。挨拶の中で、昭和 20 年に当時の福山市の工業団地である草戸に工場を構え農機具の製造をはじめたことや、その後工作機器や環境改善機器の製造をはじめ時代に合わせたイノベーションを行ってきたことなどをお話いただきました。また、SGH 校である附属の生徒は、グローバルな視点を養って活躍してほしいとの話をいただきました。



次に担当の方より、「ホーコスの歴史や社名などの由来」「景気の波に左右されないように、事業を3本化していること」、「国内とタイをはじめとする海外事業での展開などについて」「各種製品の特長」「3事業展開による安定性、海外拠点展開による発展性、財務・自己資本における健全性と、バランスのとれた経営を行っていること」についてご説明いただきました。これらの話を通して、生徒たちは、日本や世界でトップクラスの出荷額を誇るホーコスの概要について学ぶことができたようです。



### (2) 工場見学

生徒 10 人ずつ 4 グループに分かれ工場を見学させていただきました。機械の設計、知的財産管理、加工や検査の部門、塗装、組み立てなど、製品開発から製造・出荷までの様々な工程を実際に見せていただきました。また、マシニングセンタが金属の素材に、いろいろな大きさ、角度ですばやく穴をあける様子を見ることができました。生徒達は、iMQL の技術を実際に見ることで、加工の速さや、正確さを感じることができ、ホーコスがもっている技術力・開発力を実感しました。



### (3) 質疑応答

企業訪問の最後として質疑応答の時間を設けていただきました。生徒達からは「今後の産業界の変化の見通しとその対応」「タイへ進出して、日本人とタイ人の違いを克服するために工夫している点」「海外進出でのメリットとデメリット」についての質問があり、それぞれの質問に丁寧に答えていただきました。また、引率教員からも、日本のエネルギー状況と関連して、再生エネルギー賦課金が増える中、企業の影響について、そして電力の安定性と工作機械、製品加工の精度との関係について質問があり、今後、電気自動車が普及すると電力不足が懸念され、それに対する対応も必要となるとの話をいただきました。



今回の、企業訪問を通して、生徒たちは、時代に合わせて付加価値の高い製品の開発を続けるホーコスについてや、産業構造のこれからの変化についてなどを考えることができたようです。

### 〔生徒の感想〕

- 今回のホーコスさんへの企業訪問で、実際に働いておられる人の姿を見て多くのことを学べたと思います。やはり、ものを作る日本の技術はすごいということを痛感させられました。作る人だけでなく、設計、開発をしている人たちの姿勢にも研究の大切さを教えられました。
- 私たちのグループは「海外に進出した時の現地の環境への取り組み」を課題研究テーマとしています。今回の企業訪問では、このテーマをひもといていくうえで重要となる情報を得ることができました。HORKOS には環境改善機器部門があり、この部門が快適作業環境や生活をサ

ポートしています。実際に海外進出した土地への環境対策も行っていました。

○物をつくるのにどのような過程があってどんな設備があってどのような課がいるのか分かりました。設計をするところをのぞいたとき、職員がとても熱心にパソコンに向かっていました。その雰囲気がとても印象に残りました。

○ホーコスの人たち工場を進んで海外進出させていて、グローバルをすすめる会社でした。その際、言語はどのようにしているのかというと、日本人が現地の言葉を学習して、現地の人とコミュニケーションをとっていると知りました。工業に関しての技術だけでなく、そのような面でも積極的に行っているのがすごいと思いました。外国進出するのは、お客さんに近いところで営業しないと本気が伝わらないのも理由の一つだそうです。時代に合わせて会社も変わらなければいけないとおっしゃっていました。

○ホーコスが今取り組んでいることの一つとして、海外への進出があります。最近では海外へ移す企業が多く、ホーコスも同様にグローバルな展開をころがけていると分かりました。海外への国の方とのコミュニケーションの方法としては、派遣される日本人がその国の言葉を覚えることや現地の人に日本語を教えることなどです。また、今回学んだことは事業を展開する上で、常に消費者のことを考えなければいけないということです。海外の方とコミュニケーションをとることでより一層活性化されると思います。

○ホーコスは世界進出をしている会社だったので、世界的な苦労の問題や改善策を聞くことができ、SGHらしいグローバルな調査ができたと思います。まずは、言語の違い、これを乗り越えるためには日本と外国とのかけ橋となるような人物の存在が不可欠だということでした。その人物は日本に来て研修を受け、現地での中枢として活躍するそうです。また、気になったのは“電力“の問題です。日本の中でも、東日本と西日本で違いますが、そういった中で製品がちゃんと作動するのかという問題でした。これに対するホーコスの答えは正確かつ興味深いものでした。また、”時代の変化に合わせていける会社が生き延びるという考えの話“は、新しい視点という点で私にはとても印象深いものでした。

○実際に切削油をあまり出さずに穴を空けているところを見ることができ、しっかりと対応しているということがわかりました。温度調節を年中しているところがいくつかあったので、管理するために温度も保つことが大変だということがわかりました。ホーコスは今のことを考えて、何を必要としているかを考えて、様々な取り組みを行っているということがわかりました。買ってもらいたい要望に合わせてものをつくったりしているのも消費者のニーズに合わせて生産しているということがわかりました。ロゴマークに込められている意味を知ることができました。

**場 所**：アサヒグループ食品株式会社岡山工場(岡山県浅口郡里庄町里見 2751 番地 1)

**参加者**：生徒 39 名、引率教員 2 名

#### **実施内容**

アサヒグループ食品株式会社への企業訪問では、里庄町にある岡山工場第 2 プラントを訪れました。はじめに、合併によって 7 月から天野実業株式会社からアサヒグループ食品の一員になったことの紹介があり、これまで天野実業が販売していた商品はアマノフーズというブランドで販売

され続けることを説明していただきました。そのアマノフーズの商品を支える技術を紹介するDVDを視聴し、会社の概要を学びました。

その後、2つのグループに分かれ、工場の見学と、畠中岡山工場理事によるフリーズドライ技術に関する詳しい説明を受けました。見学と説明が終わると、グループで進めている課題研究に関連することや、今日の実地調査を通して抱いた疑問などについて1時間ほど質疑応答の時間をとっていただきました。

「消費者のニーズを適切に読み解くには？」という質問に対しては、「ニーズを適切に読み解くための市場調査は、客観的に把握することが大事である」とした上で、実際にはそのニーズに基づいた商品を開発することができる技術力や、その商品の将来性を判断し、店頭に並べるかどうか最終的に決定を下す経営者の判断力といった「会社の総合力が問われている」という、ニーズを適切に読み取る工夫だけでは成功できない、企業の今についても説明してくださいました。また、「東日本大震災や熊本地震以降、災害支援について考えていることは？」という質問に対しては、より長持ちする商品の開発やローリングストック（賞味期限を考慮しながら家庭に食べ物を一定量常備する考え方）に基づいた

フリーズドライ食品のセット商品を販売したり、工場が位置する自治体とは、もしもの時に施設や商品を住民に提供する地域災害協定を結んでいたりしているといったCSR（企業の社会的責任）に関することも詳しく回答していただきました。

そのほか、社員のワークライフバランスに関してや社員のモチベーションを保つ工夫、女性が働きやすい会社にするための取り組み、グローバル化に伴う商品の海外展開の過去・現在・未来など矢継ぎ早に飛び出す生徒の様々な質問に、時間が許す限り丁寧に回答・説明していただきました。生徒にとっては、課題研究を進めていく上で有意義な時間であったことはもちろんのこと、企業や現代社会について様々な視点から話を聞くことができ、自分の将来を考える時間にもなりました。

#### 〔生徒の感想〕

○ニーズに関する質問を通じて、季節によるニーズの変化や、潜在ニーズ・顕在ニーズなどの今まで注目していなかった視点やキーワードを知ることができました。今まで調べていたマーケティングから商品化の流れについても、会社の外側からと内側からではとらえ方、考え方が違うようで、まだまだ考察の余地がありそうです。やはり、会社の方々の考え方は、全体的に堅実でしたが、商品開発部と営業部や経営部との考えが少しずつずれているようにも感じました。実地調査を通して、実際に現地に赴くことで研究の課題や問題点が見えてきた。





- “グローバル化”はそう簡単なことではないと実感できた。海外と日本との問題は“文化の違い”の一言で片づけがちだが、実際には“関税問題”であったり“輸入の品目制限”などもあったりして、誰かひとりの力で解決できるものではないし、企業が解決できるものではないことが分かった。ニーズには色々な種類があることを知った。いずれにしても、最新のニーズをつかむのはとても難しいことであることが分かった。正直、生産者はもう十分ニーズを得るための努力をしていると思う。だから今度は消費者である私たちがいかに積極的に自分たちの意見を述べられるか、伝えられるかにかかっていると思った。消費者の積極性をどうしたら高められるか考えていきたい。
- 学校で行われた講演のときに比べて、実際に現場で働いている人を見たり、機械を目にすることができたりしたので、より「アマノフーズ」がリアルに感じられた。前半の作業を実際に見るときに特に印象に残ったのは従業員の方々の商品に対する配慮です。ほとんどの人が目以外は出さない作業服で作業をしているのを見て、アマノの商品だけでなく多くの商品がそういった配慮の中で作られて、私たちのもとにとどいているんだなあと感じた。質疑応答の時間では、「なぜ、海外進出をしないのか」など、私も不思議に思っていた質問に対しても丁寧に答えていただき、予想外の答えもあり、商品作りに対する一生懸命な姿勢がうかがえた。学びの多い楽しい実地調査になった。
- 「潜在ニーズをつかむためには、情報誌などからの情報収集では遅く、そのために街頭インタビューなどでターゲットとしている層に直接意見を聞いたり、消費行動をリサーチしたり常にアンテナを高くしている。顕在ニーズはお客様相談室の意見を参考にするなどしている。これらの集めたニーズを客観的に分析し、ターゲットにしている層は的確か、将来性があるか、採算性があるかなどの観点から総合的に判断していることが分かった。実地調査に行くまでは、企業の社外への働きについてのみ注目していたが、企業の方からお話を聞いて、女性の雇用や社員のモチベーションの上げ方の工夫など社内への働きかけも重要であることが分かり、企業の活動にさらに興味をもつことができた。
- 今回の実地調査を通して、フリーズドライ技術についてより詳しく学ぶことができた。また、質疑応答では他の班の質問から自分たちの班の研究にもつなげられそうながあったし、質問から他の班がどのようなことを研究をしようとしているか分かってそれも参考になった。フリーズドライの技術的な面や、企業の経営の面など様々なことを知ることができた。自分たちの研究テーマに対する理解を深めるために調べなければならないことが明らかになったし、新しく興味をもったこともあったので、班で協力して研究活動を進めてよりよい成果を発表できるように頑張りたい。

**場 所**：株式会社エフピコ 福山リサイクル工場

**参加者**：生徒 37 名，引率教員 2 名

#### **実施内容**

株式会社エフピコの企業訪問では、福山市箕沖町にある福山リサイクル工場を訪ねました。



初めに、工場の概要についてお話をいただきました。本工場は平成5年に建設されたそうですが、その建設費は当時の利益を上回るもので、背景には会社の大きな決断があったことを教えていただきました。また、企業のトレー不買運動や、環境問題が要因となった消費者運動を乗り越えてこられた経験から、常に消費者に向き合うことが、事業や会社の成功につながると説明していただきました。次に、質疑の時間に移りました。生徒たちは、エフピコさんが実践しておられる「リサイクル」、「企業の海外進出」、「地域活性化」、「設備投資」、「障がい者雇用」など、様々な観点から質問を行いました。一つ一つ丁寧に答えていただきました。



質疑を終え、リサイクル工場の内部の見学を行いました。ここでは、スーパーで回収されたトレーや容器が、再生原料に戻る過程を見学しました。工場では約600t/月ものトレーの分別が、機械や手作業によって迅速かつ正確に行われていました。しかしながら、トレーや容器の回収率はまだまだ高くないようです。今回のような工場訪問を通して、一人でも多くの方がトレー回収に協力していただければとお話をされていました。



またその際、「爪楊枝が刺さったり、手で割れたりする容器は回収できる。しかし、即席めんや納豆の容器は例外。」ということを強調されていました。容器の種類によっては再生不可能であり、それらは、他の工場で固形燃料等へのリサイクルが行われるようです。生徒たちは、時折メモをとりながら、工場の作業風景を真剣に見ていました。またリサイクルについての関心も高まったようで、「家に帰ってトレーが無いか探してみよう」という声も聞こえました。

工場案内の最後に紹介された「蒸せるんです」というレンジパックは、これを使えば簡単に蒸し料理をつくることができ、その料理のレシピがクックパッドでも紹介され、広く利用されるようになったということです。このように、様々なニーズに合わせた製品開発が行われており、1年間で約1,500種類もの商品が開発されていることを聞き、生徒たちもその開発力に驚いていました。

#### 〔生徒の感想〕

○リサイクルはトレーtoトレーのように同じものにも変わるものもあれば、まったく別のものに生まれ変わることもある。しかし、いずれにしても、消費者が「これを使いたい」「この商品が生まれるならリサイクルに参加しよう」と心を動かす商品が必要なのではないかと思った。商品開発の視点でリサイクルを考えたり、「リサイクルを行う努力」を企業、行政、消費者の立場からどのようにしたら、環境問題を解決できるか考えていきたい。

○「リサイクル」に着眼した理由について、不買運動が起こっていたなかでリサイクルが最善だった、とおっしゃっていたがそれを今も変わらず続けていることがすごいと思った。私たちの班でのテーマは環境についてだが、実際に見学してみて、障害者を雇用していることが興味深かった。色々、

サポートする人がいたり、監視する人がいたりしてきちんと安心して働ける場になっていたところが印象に残った。この先も食品を包むことは変わらないので、エフピコの需要はもっと高まっていくのではないかと思う。

○講演を聞いて、「会社は経営者次第でどうにでもなる」というのを知った。僕は今まで、労働者の能力の影響が大きいのだと思っていたけれど、それよりも経営者の腕によるものが大きいのだということが分かった。特に、「五年先を見て投資する」という経営手腕は大事なんだなと感じた。エフピコさんがここまで大きな企業になったのも、経営者の先を見越しての大胆な投資のおかげだということを知ることができた。

○回収したトレーを仕分けるのも大変ですし、その中に異物が入っていけばもっと大変で、費用もたくさんかかってしまいます。また、回収量がなかなか増えないために、雇用されるのを待つ人が増えてしまうということもありました。トレー回収・リサイクルという観点だけで、様々な問題がありました。

○自分たちの班では設備投資について議論し、エフピコの方に質問に答えていただいた。その中で設備投資を、バッテリーが打席に立つことに例えたときにその打率は2割5分だとおっしゃったことが印象に残った。これから、会社を急激にそして大きく発展させたカリスマ経営者の設備投資について調べてみたい。

○エフピコでは、生活支援部隊と職業支援部隊が本人をしっかりとケアしているから障がい者雇用が成立していることを知った。そのため、障がい者の雇用希望も多いのに、トレーの回収が増えず、分別の作業レーンが2つしか使えない。もっと回収量が増えれば、3レーン使え、より多くの障がい者を雇えるため、トレーの回収量が増えてほしい。

○トレー選別工場を見学したときに、たくさんのトレーが積んであったのにも関わらず、あまり匂いがしなかった。それは、トレーの消費者である私たちが丁寧に洗って出しているからだそう。1人1人の小さな心がけが、こうして働く人へつながっていくのだなと感じた。これから何か新しいトレーの形や機能をもった物が発明されるかが気になる。どのようにして新商品を発明して行くのか知りたい。

○実際に工場を見学してみて、機械を見ると、従業員が作業しやすいようにトレーを1列にするという点で間がられているなと思った。また、たまごのパックにあるようなピンクのトレーはリサイクルできないと聞いた。それでも、中に入るのは食材で、食材の見た目が最優先だからこちらからピンクのトレーをやめろということではできないという言葉に、自分だけではなく、他の企業のことまで考えているということを改めて考えさせられた。これからの授業では、リサイクルというテーマを中心としつつも、経営のことや労働のことも考えていきたいと思った。

○私は、エフピコは今まで失敗したことがなくて成功ばかりしていたのかと思っていた。しかし、今は実際に成功しており、それは過去に習って経営についてしっかり考えているからなのだと分かった。特に、常に5年先を見て行動する、という言葉が印象に残った。将来を考えているから、エコトレーが出来たり、障がい者雇用なども出来たのだろうなと思った。実際にトレーを選別しているところを見ると、もともとのスピードも速いのに加えて、色々と工夫がされてあったのでとても効率が良いようにされていて驚いた。企業を訪問して、企業が成功するなどの動きは経営者に左右さ

れるのだと思った。

場 所：福山大学 生命工学部

参加者：生徒 37 名，引率教員 3 名

#### 実施内容

福山大学生命工学科の久富泰資教授から「微生物を知る—酵母と発酵—」という題目でご講演していただきました。さらに、遺伝子を解析する機械や福山大学生命工学科でワインをつくる際に使う機械を見せていただいたり、目の前で酵母の働きを見られる実験をしていただいたりしました。

#### 【生命工学科の研究内容】

酵母と発酵について、実際によく口にする食品を例に説明をしていただきました。食品を発酵させると、保存性が高まり、うま味や甘味が増えられ、栄養価が高くなります。発酵させる際に用いられるのが酵母菌や乳酸菌、麹菌といったものがあります。

#### 【研究室見学・実験】

酵母菌を用いて行われているワイン造りのための機械やパン酵母として使える酵母菌を見つけるための研究を行う機材、遺伝子を解析するための機械の説明をしていただきました。

#### 【大学と企業の連携】

大学で行われているアカデミックなお話の後、ぬまくま夢工房・福山市・福山大学の 3 つが連携し、福山バラ酵母を見つけパンを作ったことを大学の視点から聞きました。ここでは、地域の宝探しをすることが地域を活性化していくことにつながることを知りました。

バラは香りが強く咲いている時間が長いからこそ酵母を運んでくる昆虫たちを引きつけます。それゆえ、バラから多くの野生酵母を採取することができます。その酵母 1308 種類野中から 8 種類だけパン酵母に適していたと実験でわかりました。この 8 種類のパン酵母が地域の宝の一つなのです。実際にパンを試食し、生徒たちは大変おいしいと感動していました。

現在、地方にある中小企業が 20 年後まで存続させることは大変難しいことです。だからこそ、大学がアカデミックな視点から地元の企業の行っていることの裏付けをしていく必要があるということを学びました。





〔生徒の感想〕

- 模擬授業では酵母の話聞いた。食品など、意外と酵母が身近にあるということだけでなく、ちょっと頭をひねって考えてみると、学んだことは身近なものに応用できることがわかった。また、今回の「バラの酵母でパンをつくる」というプロジェクトは、学校、企業、市の役員という3つの立場から話を進めていたように、何をすることも異なる立場から異なる視点をもって協議することが必要だとわかった。地域ごとの特性に合わせた特産物を作る際に、いかにして付加価値をつけるか、様々な立場が集まると具体的にどんな利益があるのかを調べてみたい。
- 福山市のシンボルであるバラの花を使ったパン作りが行われていた。バラの種類によって出来上がりのパンの食感・香り・ふくらみ具合など、様々なことが異なっていた。バラの酵母を使うという発想がとてもおもしろいなと思った。また、福山市、ぬまくま夢工房、福山大学が協力して「産業官」として地域の活性化をはかっている。3つが協力して1つではできないようなこと（専門的な研究、市民の声を聞くなど）を成し遂げることが大切だと思った。
- 微生物には色々な種類があり、それによって、色々なものに活かせるということがわかりました。種類が違うだけで、その微生物による効果がまったく違うということに驚きました。酵母についても酵母の仕組みや、増殖の仕方を知って面白いと思ったし、興味がわきました。酵母の種類が1,500種類もいることを知って、私たちの目に見えていないだけで、とても多くの微生物や菌が住んでいるんだなと思いました。また、培養の中で3mmほどの丸の中に数千万個という数の菌がいて、菌の小ささが良く分かりました。菌といたら、自分の体に害を及ぼすようなイメージもあったのですが、自分の体の手助けをしてくれたり、料理などをさらにおいしくしてくれるような効果をもたらしてくれるということを改めて知って、色々な菌があることで私たちがいろいろな面で助けられているのだなと改めて思いました。これから色々な菌や酵母に関する仕組みや働きなどを調べてみたいと思いました。
- 施設見学をして色々なことを聞いていく中で、企業が大学や外の企業と連携することの利点について考えました。福山大学には膨大な数の資料や最先端の機械が多くあり、企業と合同で商品を開発するとともに、個々の研究を行っていました。大学で勉強・研究をする人達にとっても企業と連携することは貴重な経験になるし、企業としても大学とつながることは大きいと感じました。
- 福山大学を訪問する前からバラの酵母がパン作りに活かされているのは知っていたが、販売経路や酵母そのものの仕組みを学び、実際にバラの酵母で作られたパンを食べるなどして、福山を活性化させるために今、何が行われているのかを具体的にイメージすることができた。今回の実地調査で、バラは香りが強く、咲く期間が長いという理由で酵母に向いていると教わった。そこで、他にもその条件を満たした植物があるのか、あればそれで福山をもっと活性化することはできないか疑問に感じた。
- 今回の実地調査で、大学での研究の高度さ、幅広さ、柔軟さを知ることができたと思います。元々生命工学系の研究分野だとは知っていましたが、ワインの醸造やパンの生産まで行っていて、充実した設備に驚きました。この訪問を受け、企業と協力した大学の実践的な研究に興味が増えました。自分も大学に入ったらy挑戦してみたいと思いました。
- 福山で有名なものの一つであるバラの魅力を伝えるとしたら、まずバラの花自体の見た目、香りを

楽しんでもらうためにバラをたくさん植えて華やかな花壇や公園を作ると思う。だが、見て楽しんでもらうだけではなく、食に結びつけて魅力を伝えるという方法はやはり斬新だと思った。「バラから酵母を抽出する」という発想は毎日福山の魅力を知ってもらおうと考えていくからこそ生まれたのだとも思った。福山市、ぬまくま工房、福山大学が連携することで6次産業をつくり挙げていることがわかったが、それぞれの持つ役割をもう少し具体的に調べ、6次産業のしくみについて詳しく知りたいと思った。6次産業に結び付けることで福山に既にあるものでも新しい魅力の伝え方で人を呼び込めるかもしれない。

場 所：福山市役所

参加者：生徒名 38名，引率教員 4名

### 実施内容

福山市役所と市民参画センターを訪問しました。事前に生徒が考えている研究テーマおよび質問事項を市役所で調整役をしていただいた企画政策課高橋様にお伝えしていたので、その質問に個別に答えていただけるよう複数の課の担当者に、丁寧なご対応をいただきました。

バラによる福山市のPRを研究テーマに掲げた班は、市民参画センターにて説明を受けました。福山市の公式キャラクターであるローラちゃんも駆けつけてくれました。他の班はまとまって市役所に入り、各課に分かれての活動となりました。生徒が考えている研究テーマは、福山市の人口減少対策・少子高齢化と人口減少（2つの班で実施）、福山駅前の有効活および福山駅の活性化について（2つの班で実施）、バラによる福山市のPR、福山市の医療体制と子育て支援、投票率の低さ、観光で集客を図るなどでした。

駅前の有効活用および福山市の少子高齢化と人口減少について研究テーマに設定した班には、福山駅前再生推進室、情報発信課、都市計画課、産業復興課から6名の担当者が質問に対して答えを返してくださったり、質問に関連する事柄の具体を示してくださったりしました。

投票率の低さを研究テーマに設定した班では、選挙管理委員会が対応してくださいました。生徒からの質問事項では、『2年後に投票権を持つことができるようになるものの、初めて投票するにあたっては、何をどう行ったらよいか分からず不安に思っている人が多いから、初めての人を対象に、選挙の手順や知っておくべきことを学ぶ日を設定してもらえれば、不安を解消して投票に臨める。』などと思いを語った生徒に対しては、



福山市としては、若い有権者に不安思いを消せるように対策を検討していること、選挙の手順が書かれている「選挙パスポート」を他県が作成しているものを参考にして、福山市を検討して、高等学校の3年生に配布したいと考えていて、図解入りを検討し、かなり具体的にこの取り組みが進んでいるとの説明も受けました。

#### 〔生徒の感想〕

- 今回、市役所の観光課のお話を聞いて、福山市の観光は「鞆の浦」「福山城」「バラのまち」の3つを軸に振興していることが分かった。鞆の浦は、今年は「いろは丸事件」から150年経つ年、また福山城は、2022年で築城400年を迎えるそうだ。そのような節目と観光の結びつき、また、それらの歴史についてもっと詳しく調べていきたい。「バラのまち」については、地域みんなでバラを育て、市民運動をPRする。という目標が掲げられているが、実際どのように観光を結びつけていくのか不明瞭な部分を感じた。私たち自身で、バラと観光をどう結びつけていくのが良いか考えてみるのもいいと思った。
- 市役所の職員さんはすごく気さくな人で、とても面白かったです。昔、伏見町の再開発がなくなったのは、不景気ということもあるけれど、1番の理由は、入ってくれる店舗がなかったからだそうです。天満屋と伏見町をつないだ大規模なショッピングモールをつくってもお店が入らないので、利益が見込めないということで、その計画はなくなりました。これからの福山は、大きな商業施設でまとめるのではなく、小さなお店が点々とし、歩いて回る福山をつくろうと計画しているらしいです。美観地区のようなゆっくり、ゆったり歩いて回れる福山市の実現に期待したいです。
- 福山駅前の再開発について。福山駅前の伏見町やショッピングセンター跡を有効活用できないかと思い質問をした。すると、市の問題としての以前に、土地の所有者が関係していると分かった。土地の所有者の意思で建物を残していたり、所有者が不明になっていることもあるらしい。これは、全国の空き家問題とも共通することだと考えたので、国全体で、空き家や古い家に対する取り決めを変えたほうが良いと思った。駅前が、車が通りづらい件については、これからは高齢者が増える（つまり、車を運転できる人が減って行く）ので、歩行者にとって利用しやすい駅前にするという回答を得られた。表町など、最近整備された場所が例のようで、これは納得できたが、手前の商店街にも手が加えることができればと思った。
- 少子高齢化対策としては、まず「若者の転出を抑制」することに目を向けていて、例えば大学生向けの企業見学会を実施したり、駅前に就労支援、情報交換の場としてレディーワークカフェ（駅前女子カフェ）というものをつくったり、子供を生み育てる環境をつくるために、子育て世帯への在宅ワークの支援、また市内12ヶ所にネウボラの窓口を設置したり、男性の育児参加を促すためにセミナーを実施したり、低所得者に対して保育料の設定を細かくするなど支援体制を整えていることがわかりました。
- 不妊治療については、福山市は合計特殊出生率が他に比べて高いらしいのですが、35歳の妊娠適齢期までの妊娠を促す取り組みを進めていることがわかりました。具体的には、早い年齢での妊娠、出産を促すため、大学生への講演会などを通して啓発したり、リーフレットを配布して正しい知識を広めたりといった限られた予算の中でできる事業です。また、広島、呉、福山には不妊治療がで

きる病院があるのに対して、三次市はないので交通費を助成しているという他の自治体の取り組みも知ることができました。

○調べたことや、お話を聞いた中で全体的に欠けているのは情報発信だと感じました。色々な対策を考えてくださっているのに、それが知られていないのはとても悲しいです。まずは福山市民に知ってもらえるように、そしてその後は福山市民に協力してもらえるようにするためにもっと積極的にSNSなどでアピール（少子高齢化対策、転出抑制など）をすると良いと思いました。そうするための方法を考えたいとも思った。

○まず、選挙を運営・管理するにあたって、選挙啓発という選挙に対する意識を高めたり、投票率を上げることを目的とした期間があり、「投票率の低さ」というものはやはり大きな課題なのだと実感した。福山市の投票率が低いのは事実だが、だからといって市が何もしていない訳ではない。（例えば、出前講座、模擬投票など）また、やはり全体の投票率の低さに直結している理由としては18歳からの若い世代の投票率の低さが気になったので、学校選挙など、若い世代へ向けた対策案を考えていきたいと思った。そして、日本国内で投票率が高いといっても、小さな差しかなく、データが少ないので、海外の投票率の高い地方を参考にしながら、世界との比較も行っていきたい。